

第66期（2012年4月期）日本語研修コース

鹿 島 央

2012年度4月期の大使館推薦の研究留学生は29名で、文系部局12名、理系部局17名であった。名古屋大学へ進学する研究留学生が26名、残り1名は総合研究大学院大学（総研大）、2名は愛知工業大学であった。文系部局では、経済学研究科4名、国際開発研究科5名とその他、文、教、言の各1名であった。理系部局では、工学研究科8名、理学と環境学がそれぞれ3名、農学2名、情報学が1名であった。今期は29名のうち、およそ半数近くの13名が初中級レベル以上の既習者であり、母国で学習してきている留学生の割合が高かった。

1. 研修生

A. 大使館推薦（研究留学生）

文部科学省より配置された大使館推薦の国費研究留学生は、24ヶ国29名（ガーナ、タイ、トルコ、ナイジェリア、ブラジル各2名、アゼルバイジャン、アルゼンチン、インドネシア、カンボジア、サウジアラビア、シリア、シンガポール、ジンバブエ、スリランカ、スロバキア、中国（香港）、フィリピン、ブータン、ベネズエラ、ボリビア、ミャンマー、メキシコ、モザンビーク、ロシア各1名）であった。今回、29名のうち14名が全学向けの日本語講座を受講した。このうち、1名は初級レベルの学生であったが、研究上の都合でSJ101を受講した。全学日本語コースでの内訳は、IJ112（全学集中日本語初級後半）3名、IJ211（全学集中日本語中級前半）2名、IJ212（全学集中日本語中級後半）5名、SJ300（全学標準日本語中上級）3名であった。

以上のように、第66期は研究留学生29名のうち15名が日本語研修コース、残り14名は全学向け日本語講座を受講した。

2. クラス編成

授業は、昨年度と同じく2クラス編成とし、専任教員2名、非常勤講師8名の計10名が担当した。

3. 時間割と日程

授業はこれまでのように月曜日から金曜日まで、午前8時45分から午後2時30分まで90分授業を3コマ行った。

コースの日程は以下の通りである。

4月11日（水）開講式、4月12日（木）授業開始、夏季休業7月27日（金）～8月31日（金）、9月3日（月）授業再開、9月11日（火）修了式

開講式の前に行う到着時のオリエンテーションは、5日（木）と6日（金）の2回に分けて行った。プリアリエンテーションでは、名古屋大学全体の日本語教育および日本語研修コースの概要、既習者の認定、学習背景アンケートを行っている。

4. カリキュラム

カリキュラムは、(1) 主教材 *A Course in Modern Japanese [Revised Edition], Vols. 1 & 2* (名古屋大学日本語教育研究グループ編) を中心とする授業、(2) その他の活動（テーマを決めてワープロで書き、話す：楽しかったこと、趣味、国の観光地、国との違い）(3) 専門について話す、の3つで構成した。今期は特に、話す技能を伸ばすことに重きをおき、様々な活動を行った。以下、概要と修了アンケートの結果について報告する。

(a) 教科書を中心とする授業（1～14週）

授業内容の詳しい説明、学習の仕方については、授業開始後すぐにSTUDY GUIDANCEを行い、学生には周知をしているが、開始後すぐということもあり、

なかなか理解、定着するところまではいかないようである。進度は、これまでのように夏休み前に主教材である *A Course in Modern Japanese, Vols. 1 & 2* が終了するカリキュラムとし、最終テスト、話すテストを行った。筆記テストのチェックは夏休み前に行った。

・ Drill

Notes on grammar を読んで Drill を予習してくるようになってきている。そのため授業内での教師の文法説明、練習の仕方にも違いがあり、修了アンケートで教師による文法項目の扱いの違いを指摘されることがある。6課からは Conjugation Quiz を行い、活用の定着を図った。

・ Dialogue

修了アンケートでは、Dialogue が語彙の習得という面で役に立ったというコメント、あるいは繰り返しにより日本語力が上がったというコメントがあった。

・ Discourse Practice & Activity

各課の Discourse Practice にもとづくロールプレイなどで、対面での授業を休む許可をもらう練習、指導教員とのアポイントあるいは友達との約束を電話で断る練習などである。重要であり、また話す自信がついたとのコメントがあった。

・ Aural Comprehension

各課の Aural Comprehension は、宿題として提出することになっている。聞く力の養成に役立ったというコメントが多かった。

・ Reading Comprehension

トピックが実生活に役立たないというコメントがあった。統計など少し時間のたっているものもあるので、検討課題とする。

・ WebCMJ

WebCMJ は文法項目の練習であるが、今期も復習として Drill が終わった後に、スケジュールに組み込んだ。授業内での扱いは10課までとし、11課からは自習としたが、自分で練習する学生は少なかった。課題である。

・ 漢字および漢字セミナー

300字の導入と練習。量的な問題と導入速度の問題が指摘されている。『KANJI&KANJI』を貸し出しているが、iPhone などを使用するため、紙媒体の使用率はほとんど0である。

・ Dictation

先期と同じように5課まではこれまでの方法とし、

6課からは文レベルとした。

(b) その他の活動

・ 話す練習

話すテーマはこれまでと同じで（「楽しかったこと」「趣味について」「国の観光地」「国との違いについて」）それぞれについてワープロで原稿を書き、話す活動として口頭発表を行った。「国の観光地」と「国との違いについて」は、合同クラスでの発表形式とした。ほぼ全員が満足したという回答であった。

日本人ゲスト(各回4名)にインタビューする活動も例年通り2度行った。どのように受け答えをすればいいか考えるのに役立ったというコメントがあった。

今期は、Talking Time で自主的に話すことを促すために、日用品や調理の用語など追加資料として語彙を渡したが、すべての回で新しい語彙を出せなかったため、全般的には Talking Time の試みには満足しているものの、さらに資料が必要とのコメントがあった。

・ 書く練習

書く技能については、話す練習での原稿をワープロを用いて書く、あるいは最終週に行う専門発表での準備段階で発表内容を書く程度のことしかできていない。

・ Pronunciation Practice

例年のように特殊拍の長さの知覚とアクセントの下降の位置の知覚ができるように、AD図を用いて練習を行った。とても有用であるとの評価を得た。

・ 文化の紹介

日本の遊び(お正月)と年中行事について、ビデオをみながら紹介した。

・ ホームビジットプログラム

今期より、ホームビジットプログラムは行わないことにした。

(c) 「専門について話す」(第15週)

このプログラムでは各留学生それぞれが持ち時間8分(質疑応答も含む)で専門領域について発表した。発表は207講義室で行った。専門外の学生にとっては難しいのは当然であるが、自分の専門に関する用語や概念を日本語で知ることには意義があったとするコメントが多かった。

5. アンケート結果

15名のうち、14名から回収した。

(1) コースの満足度

4段階で評価してもらった。「3:とても満足」から「0:まったく満足しない」で、14名中12名が「3」、「2」と「1」の評価がそれぞれ1名であった。

(2) 自身の学習成果への満足度

4段階の評価で、「3:とても満足」から「0:まったく満足しない」。14名中9名が「3」、3名が「2」、2名が「1」の評価であった。「1」の評価をした学生では、日本語だけに集中できたらもっとよかったはずと回答しているものもあった。9月に入試を控えている学生にとっては、集中コースは大変であるが、それにしては今期はまじめに取り組んだ印象が強い。全体的には、期待していたほどできるようにはならなかったと回答した学生も2名いたが、12名については、期待していたのと同じか、期待以上の成果があったと回答している。

(3) アンケート項目

前回のアンケートから「この6カ月間、どのようにしてモチベーションをたもつことができましたか」という項目を入れた。以下のようないくつかの回答である。

- ・よい機会と考え、毎週日本人と話すようにした
- ・今日本にいたので、話せるようにならなければならない
- ・クラスがおもしろかった
- ・友達と家族のおかげ
- ・どのように時間がたったのかわからない

6. まとめと問題点

日本語研修コースは、前期は夏休みをはさんで15週間、450時間の集中コースであるので、かなりの時間を日本語の学習に費やす。したがって、このコースを修了すれば次の学期からは全学日本語コースの少なくとも、初中級から、あるいは学生によっては中級から受講できてもおかしくないはずである。しかしながら、日本語研修コースの期間中は、入試の準備（特に前期）、ゼミへの出席のための準備、学会への参加、実験の実施など様々なことがあり、実際には日本語学習のために十分な時間が確保できていない場合もある。集中コースは進度が早く、そのために授業時間中には各学生が十分な練習時間を確保できるように少人数でなければならないし、学生にも十分な準備が必要である。したがって、授業以外で日本語学習に時間が使えない状況では、どうしても授業内容が消化できず、わからないことが蓄積したまま次へ進んでしまう悪循環に陥ってしまう。その結果、次年度ではまた初級から繰り返すというような事態になる学生が出てしまう。コーディネーターとしては、日本語研修コースの時間が最大限有効に活用でき、修了後はある程度の自信をもって、部局に入ってほしいと考えているし、指導教員も当然そのように考えるはずである。最近では、指導教員の強い支援のおかげで、日本語に集中できる環境になっている学生がほとんどである。責任者としては、留学生が研修期間中十分な成果をあげ、無駄な時間を過ごすことのないように、今後とも配慮していきたいと考えている。